

基調講演2: 中岡 成文 (哲学者、大阪大学元教授)

「子どもとはだれ? 哲学対話とはなに?」要旨

私はヘーゲル哲学の研究から「臨床哲学」の開発に移り、その過程で哲学プラクティス、哲学対話に出会いました。私の哲学対話の実践は、がんや難病の当事者を対象としたもの（おんころカフェ）が中心ですが、日常的に自分の内なる〈子ども〉に触れつつ、外なる〈子ども〉と関わることは重要だと考えています。ヘーゲルは、人間の言語表現や行為の〈取り返しのつかなさ〉に対して鋭敏でありつつ、あえて語り、行為すること（世界の内に一本の線を引くこと）を研究者としての私に教えてくれました。他方で、現実の子どもと関わり、共に何かを探究するとき、さまざまな戸惑いに襲われます。言語を習得中で、抽象能力が未発達の子どもの、どのように対話し、どのように〈指導〉すればいいのか。「戦争はやめて」と土下座しようとし、「税金はいやだ」と言い捨て、自分は「正義」を実践しているとシンプルに主張する子どもと、どんなふうにも社会制度や政治の仕組みを語り始めればいいのか。学校教育に対し、具体的にはたとえば国語教科書の教材のメッセージやイデオロギーに対して、対話実践者はどのような態度を取ればいいのか、などなど。私はどちらかという、子どもの「ことばの無さ」が気になり、自分の中にもある「ことばの無さ」に向けて測鉛を下ろすことを好みますが、みなさんはいかがですか? 〈子ども〉はどのような「対話的存在」であるのか、ご一緒に考えてみましょう。